ごはん (1)

（次の文章は、筆者が女学校の三年生だった頃に、東京大空襲にあった経験をえがいたものです。）

三月十日。

その日、私は昼間、※蒲田に住んでいた級友に誘われて潮干狩に行っている。

寝入りばなを警報で起された時、私は暗闇の中で、昼間採ってきた蛤や浅蜊を持って逃げ出そうとして、父にしたたか突きとばされた。

「馬鹿！ そんなもの捨ててしまえ」

台所いっぱいに、蛤と浅蜊が散らばった。

それが、その夜の修羅場の皮切りで、おもてへ出たら、①もう下町の空が真赤になっていた。我家は目黒の※祐天寺のそばだったが、すぐ目と鼻のそば屋が焼夷弾の直撃で、一瞬にして燃え上った。

父は※隣組の役員をしていたので逃げるわけにはいかなかったのだろう、母と私には残って家を守れといい、中学一年の弟と八歳の妹には、競馬場あとの空地に逃げるよう指示した。

駆け出そうとする弟と妹を呼びとめた父は、白麻の夏布団を防火用水に浸し、たっぷりと水を吸わせたものを二人の頭にのせ、②叱りつけるようにして追い立てた。この夏掛けは水色で縁を取り秋草を描いた品のいいもので、私は気に入っていたので、「あ、惜しい」と思ったが、さっきの蛤や浅蜊のことがあるので③口には出さなかった。

だが、そのうちに夏布団や浅蜊どころではなくなった。※「スタア」や料理の本なんぞといってはいられなくなってきた。火が迫ってきたのである。

「空襲」

この日本語は一体誰がつけたのか知らないが、まさに空から襲うのだ。真赤な空に黒いB29。その頃はまだ怪獣ということばはなかったが、繰り返し執拗に襲う飛行機は、巨大な鳥に見えた。

家の前の通りを、※リヤカーを引き荷物を背負い、家族の手を引いた人達が避難して行ったが、次々に上る火の手に、荷を捨ててゆく人もあった。通り過ぎたあとに※大八車が一台残っていた。その上におばあさんが一人、チョコンと坐って置き去りにされていた。父が近寄った時、その人は黙って涙を流していた。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋 所収「ごはん」による）

※蒲田…現在の東京都大田区。　祐天寺…現在、東京都目黒区。
隣組…戦時下の国民統制のためにつくられた住民組織。
「スタア」〜…「スタア」は映画雑誌。当時筆者は空襲のたびに雑誌や本を防空壕に持ち込んでいた。
リヤカー…人が引いたり、自転車の後ろに連結したりして荷物運搬に用いる荷車。
大八車…荷物運搬用の大きな二輪車。二、三人で引くもの。

東京大空襲

一九四五年三月十日の未明、B29爆撃機約三百機による東京への大規模な無差別爆撃が行われた。およそ十万人の人々が亡くなったと考えられている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「もう下町の空が真赤になっていた」とあるが、これはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう夜が明けたかのように感じられたということ。
イ 下町の空が暮れかかっていたということ。
ウ 既に下町に炎が広がっていたということ。

〔　　〕

(2) ——線②「叱りつけるようにして追い立てた」とあるが、なぜ父は叱りつけるような態度だったのか。適当なものを選びなさい。

ア 空襲の中で、弟と妹をなんとか安全な場所に逃れさせようと必死だったから。
イ 空襲なのに場違いなことを言う弟と妹が情けなく、怒りがわいたから。
ウ 目の前に危険が迫っているのに、隣組の役員をしていて逃げるわけにいかなかったから。

〔　　〕

(3) ——線③「口には出さなかった」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 蛤や浅蜊を持ち運ぼうとして叱られていたので、この状況で夏掛けを惜しいと言うと父がまた怒るだろうと思ったから。
イ 夏掛けは品がよく、お気に入りのものではあったが、弟と妹の命を守るためなら惜しくはないと思ったから。
ウ 自分の家に火が迫ってきたので、浅蜊や夏布団などを気にかけているような状況ではなくなってしまったから。

〔　　〕